

## 寄稿

## 私と作業科学 ―ひとの現実世界や実際の生活状況の探求―

藍野大学 医療保健学部 作業療法学科

ボンジェ・ペイター

Peter Bontje

(日本作業科学研究会理事)

## はじめに

いつ作業科学（以下OS）について認識したのか、私は正確に覚えていませんが、おそらく1990年代のはじめに色々な文献を読んだ頃だと思います。そして、故佐藤先生が開催された作業科学セミナーに参加して、少しずつ興味がわいてきました。また、私の修士課程における研究法のモジュール（2000年）で、「作業の科学というOSは本当に望ましいか」、いや「作業療法の科学のほうがいいではないか」という論点に関して、院生同士が激しく討論をしました。実は、私はその際には、OSに対してまだあいまいな態度を持っていました。すなわち、その時代に「occupationとは何か？」を探求することがOSの主題だと私は思っていましたので、作業に関して知識が大切だと思いましたが、療法士としては回復過程とその援助方法にOSがどのように寄与するかよく理解できませんでした。その後、南カリフォルニア大学のwell-elderly study（有名な無作為化比較試験）という、作業を中心とした介護予防の効果を検証した研究報告書を読み、OSの可能性をようやく認識しました。

OSの文献を読んだり、OSセミナーに参加にしたりしながら、作業に関して理解を少しずつ深めていきました。それで、クライアント中心の作業療法と障害者自身の生活の回復（再建）過程について感心を持っている私には、OSの中から、自分自身が持っている疑問・関心について有益な視座と研究方法を見つけることができました。では、自身の研究テーマの1つを使って、「OSと私」について述べます。

## 作業科学と自身の研究

私が辿っている研究テーマの1つは、人びとが障害を被ってから、自分の生活へと回復していく過程で、どのように問題を克服あるいは乗り越えていくかというものです。作業療法の対象として一番多いクライエ

ントは高齢者なので、障害のある高齢期のクライアントを対象に研究しています。しかし、OSに関する先行研究には、高齢者にとって作業の意味を明らかにすることを中心とする研究がありましたが、作業遂行上の問題解決方法（adaptation）とそのプロセスに焦点をおいた研究はほとんどありませんでした。ですから、私の研究テーマを辿っていく際に、Schkade氏とSchultz氏のOccupational Adaptationは自分の研究の鍵概念として採用しました。一方、Yerxa氏とClark氏が指摘しているように、クライアントの視点を知らないより良い支援が提供できないと思われるので、質的研究方法を選びました。また、まだよく説明されていなかった生活活動上の支障を克服していく過程の本質に明確化が必要だと思われていたので、その際、OSにも注目されていた現象学的研究を採用しました。これは、私の2001~2002年ごろの修士課程の研究のことです。

さて、2004年から、スウェーデン王立カロリンスカ医科大学の博士課程に入学を希望しました。入学試験では、完全な研究計画が必要でした。OSに卓越したナラティブ研究に詳しいJosephsson氏の指導を受け、入学ができました。研究の計画を検討しながら、OSがどう影響するかどうかは、その時はそれほど意識しなかったかもしれませんが、振り替えったら、やはり影響していました。

まず、OSは、1990年代の「作業とは？」とか「作業の従事・参加の特徴とは？」という学問から離れてきて、「作業的存在がどのように発達するか」とか「人間の作業はどのように健康と幸福に寄与するか」という学問へ現在転移されつつあります。その動向に伴って、OSは作業の状態だけではなく、作業の遂行と作業的存在に関する色々なプロセスを中心としてきましたので、自分の研究を計画しながら、色々参考になりました。

例えば、障害学が指摘した同様に、OSも従来の考え方の変化を主張しました。OSは障害と病気からの日常生活の回復が医学的な過程ではないと私たちが考えられるように主張しています。ですから、研究の視座としては、作業療法に長い伝統のあるAdaptationと人類学に伝統のあるTransitionということが鍵概念になりました。したがって、Transitionというのは、自らの生活へのもどって行く過程を意味します。そして、Adaptationというのは、作業遂行の要求と持っている能力の差を改善・修正しうる手順・行動と補える手順・行動に従事する過程を意味します。

そして、生活活動上の障害を克服していく過程は、数ヶ月・数年間に渡って、繰り返し起こる過程だと思われてきました。したがって、その過程における内容および重要因子を特定することを目標とした研究を計画しました。私の修士課程での研究の結果のように、社会学者の細田氏が、クライアントは自らが持っている経験を対照させて、様々な生活しづらさに働きかけて、問題を解決したり、意味づけたりしていることを指摘しました。これは、バラバラになった生活とバラバラになった自分を再統合させる個人的なプロセスではなくて、社会文化的なプロセスだと分かってきました。したがって、生活活動上の障害の克服過程は家族や医療保健福祉の従事者などを含む社会的な過程があります。その上、そのような過程の中に、そのひとの行動と思考がナラティブ的に経験されたり、ナラティブ的に表現されたりするものと考えられています。ナラティブ研究方法は、ひとの現実世界や実際の生活状況を探求することができるので、私の研究には、ナラティブ研究方法論は大きな役割を持っています。それで、その過程における社会的側面を含む内容および重要因子を特定するためには、ナラティブ研究方法がより適当な方法だと思います。

博士課程の研究プロジェクトのデータ収集などを今年から開始していきます。

### 結論・まとめ

数十年以上も前から、人間の作業的存在の維持・改善を目指している作業療法や他の専門職には、医学モデルに基づいた知識が不十分だと思われる。OSが人類学や社会学や心理学など人間科学の知識も不可欠だがわかった上で、色々な科学を統合し、新しい科学として発達しています。研究者としての私には（作業療法士と作業療法の教員としても）、OSから貴重な知識と研究方法を学びました。

大事なことをひとつ言い残しましたが、OSは、作業に関する知識を深めたり、視野を広げたりして、作業に対する意識・知識を向上することができます。そして、将来的にその意識と知識がもっと向上することを期待しているので、クライアントにより良い支援を提供していくことが期待できると私は思っております。

### 参考文献

- Bontje P., Kinebanian A., Josephsson S., Tamura Y. Occupational Adaptation: The experience of older persons with physical disabilities. *Am J Occup Ther*, 58: 140-149, 2004
- Clark, F. Occupation embedded in a real life: Interweaving occupational science and occupational therapy. *Am J Occup Ther*, 47: 1067-1078, 1993
- 細田満和子. 脳卒中を生きる意味. 病いと障害の社会学. 青海社. 2006
- Josephsson S, Asaba E, Jonsson H, Alsaker S. Creativity and order in communication: Implications from philosophy to narrative research concerning human occupation. *Scand. J Occup Ther*, 13: 86-93, 2006
- Mattingley C. Emergent narratives. In C. Mattingley & LC Garro (Eds.). *Narrative and the cultural construction of illness and healing*. University of California Press. 2000
- Schkade J., McClung M. *Occupational Adaptation in Practice*. Slack inc. 2001
- Yerxa, E.J. Seeking a relevant, ethical, and realistic way of knowing for occupational therapy. *Am J Occup Ther*, 45: 199-204, 1991